
言語研究センター共同研究

中間言語と第二言語習得（2） 日本人の学習スタイル

アルトゥーロ バロン ロペス

今年度、我々の研究グループは中心課題として「外国語学習における日本人学生の学習スタイルの役割」について取り組んできた。

これまで「第二外国語の習得」に関する研究分野では、第1言語の話者と習得を目指す第2言語の話者を隔てている違いとは何かという点が注目されてきた。その関心は主にそれぞれの言語の構造そのものの違いや双方の話者の暮らす国々の文化的、社会的背景（伝統、宗教、歴史、芸術など）に向けられてきている。一方で、学習者の育った国の教育システムが彼らの学習行動に及ぼす影響

について着目した研究はほとんど行われていないのが現状である。

去る11月25-27日に東京で国際シンポジウム「21世紀、グローバル時代の外国語教育」が開催され、スペインのFundación ComillasのInmaculada Martínez教授が来日した。Martínez教授は学習スタイル研究の専門家で、その博士論文はまさにスペイン語を学ぶ日本の大学生の学習スタイルを扱ったものである。

Martínez教授によれば、教員の仕事は伝達したい内容に対する知識を与えるだけではない。それ

らの内容を伝達するもっとも適した方法を探すことも必要である。つまり、我々教員は、学習者がどんな学生であるのか、また彼らがこれまでどのように学習してきたのかを考えたうえで、その学習の継続を助けるあらゆる手段を取らなければならないということだろう。

確かに、学習者がどんな学生であるか、そして彼らがより効率的に学ぶにはどうしたらいいかを理解し、それを彼ら自身にも意識させることができれば、自らが決断し、生涯にわたって自律的に学習し続ける人材を育成することができるのではないだろうか。
